
異世界召喚系

狩人二乗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界召喚系

【Nコード】

N9638L

【作者名】

狩人二乗

【あらすじ】

俺は、異世界に召喚された。

第一話 『なんと俺が異世界に！』

梅雨に入り始めた六月のある日、俺は「ハア」とため息をつきながら登校していた。

俺の名前は風神水波。男子の平均身長にギリギリ届くか届かないくらいの背丈を丸めながら、なびく長髪をおさえて歩く。目の前には黒猫。頭上からはカラスの泣き声がふりかかる。暗い雲も相成つて、俺のテンションはたださがりだった。

「あーもう嫌だったの、学校。勉強もテストも文化祭準備も全部めんどくせえ」

独り言を呟き、俺は再度ため息をつく。

学校つていうのが昔から嫌いだった。うざったいことばかりで、周りの奴らなんか俺を無視する。おかげで放課中は机としか喋れないし、昼食中の喋り相手弁当箱の野郎しかいなかった。

うつとうしいったらありやしないそんな学校生活。小学生から高校生に至る今の今まで、俺はそんな生活に身を費やされていた。

「あーあ。頼む、どっかの誰か。俺をこの世界から引越させてくれ」

空中にそう頼んだのだが、やはりというべきかどうなのか、俺は今生きてる『世界』つて奴から逃れることが出来なかった。前方にいる黒猫が俺を見て「ばっかじゃないの」と笑う。お前はサードインパクトを防ごうとしていたラングレーさんか、と突っ込みを入れたかったが、俺の羞恥心の限界を超えないようにする為、思い踏み止まった。

「……つて、は？」ここで、俺は気づいた。「今、この猫喋らなかつたか？」

「喋ったわよ」

俺が黒猫に対してこわばった表情で指摘してやると、黒猫は二回目の「ばっかじゃないの」をいいながら四足歩行で俺に近づいてくる。

「な……ああっ！ 猫が！ 喋ってる！」

「そんな驚かないでようつとうしい。何？ 猫が喋っちゃいけないなんて誰が決めたの？」

「少なくとも猫が喋っていいなんて誰も決めてねーよ！」

「ふん、屁理屈」

「どこが！」

奮然と叫びながらも、俺は冷静に考えていった。

「そうだ。これは夢なんだ。猫が喋るなんてありえねえもん」

「喋る猫が登場する夢を見るなんて淋し過ぎるでしょ、あんた」

「誰のせいだと思ってる！」

「勿論、あんたのせいよ」

黒猫は俺の足に近づき頭をすりすりしながら、言う。「そう、これはあんたのせい。私があんたをムーガドンに連れていくのも、上の空で「この世界から引っ越しさせてくれ」とかいつてたあんたのせい」

刹那。

「うわ」俺の体が、光り出した。「うわわわわ！」

変な浮遊感に包まれながら、目の前が白色に染まっていく。

「なんだこれなんだこれなんだこれ！」

「力を抜いて。ムーガドンに移動するだけだから、害はないわ」

「んなこと言っても……うわああああー！ー！ー！」

視界が真っ白に染まった。

次に意識を取り戻すと、目の前が凄いことになっていた。

「はあ？」

服が、髪が、風景が、人が 何もかもが凄かった。

「どう？ 凄いでしょ。ここがムーガドン。あんた達の世界とは違

う、所謂パラレルワールドよ」「いつの間にか俺の頭の上に乗っかってきた猫が言う。

「……異世界ってことか、ここは」

「まあ、そうとも言うわね」

「……なんで俺をここに連れてきたんだ？ 何の用もなしにこんな場所に連れてくる訳ないよな」

俺がそう言うと「話が早いわね」と感心する黒猫。

「いいわ。ぐだぐだ言っても始まらないし。用件だけ言うわね」

「おうよ」

「この世界は昔から貧困に悩んできたの。王様からの税の徴収が酷かったわ。このままいくと佐藤さんが全滅させられちゃう」

「リアル鬼ごっこかよ」

「そこで。今からあんたにはこの世界で選ばれた勇者になってもらうわ」

俺の発言を完全に無視しながら黒猫は言った。

勇者、か。

今さっきまで学校に向かう途中だったのに、なにやらとんでもないことになっちまった。

「ま、いつか」半ばあきらめる俺。「やってやるよ、勇者。俺の名前は風神水波」

「私の名前はミナギラ・アル・ユーロ・バスタード。皆からはミナって呼ばれてるわ。よろしくね、勇者様」

こうして俺は異世界 ムーガドンを救うことになった。

「……なんだいこれ」

「なんだいこれって、あの、一応小説の持ち込み、なんですけど」

「えーと、一応聞くね。全部で何話あるの？」

「六十三点五話です」

「点五話ってなんだい」

「いやあの。番外編なんで一話にする訳にはいかないかなと思いついて」

「番外編をなんで作品にわざわざ入れるかねえ。それにしたって六十話もこのノリが続くのかい……」

「六十三点五話です」

「意外と細かいね、君。うーん、これ、持ち込みなんだよなあ。悪い点とか指摘してもいいのかい？」

「は、はい！ お願いします！」

「まずは、主人公の名前……これ、なんて読むの」

「風神水波で『ふうじんみずなみ』って読みます」

「そんな名前の男の子なんていないよね、現実に。親御さんは何を思っ水波なんて名前をつけたんだろうね。……あと、地の文で自己紹介しちゃってるね、主人公君」

「はい」

「やめた方がいいよ、これ。基本的に誰かに呼ばせるかして主人公君の名前を強調させないと、読者さん方覚えてくれないからね、名前」

「風神水波だから大丈夫かな、と」

「驚くよ、読者さん方。「風神なんて苗字をつけるご先祖スゲエ」とかいつて開始数行で驚いちゃうよ読者さん方。あとね、独り言が痛々しいね主人公君。独り言多いし」

「え？ 普通に言いません、こういうこと」

「カウンセラーに見てもらつことをオススメするよ。あとは……決定的に情景描写が少ないね。特に、む、む」

「ムーガドンですか？」

「そう、それ。そこに移動してからの描写が極端に省かれてるね。やたら凄い凄い言ってるけど具体的にどう凄いのか全く想像出来ないし」

「めんどくさくなってしまいました」

「……今の発言、全ての小説家に対する暴言だからね。二度と言っ
んじゃないよ、そんなこと。うーん、あとね、うわーとか言うとき
はあまり伸ばし棒を使わない方がいいね。なんか読む気なくなっ
てくるから」

「いや、ですが叫ばせないと大変さがわからないじゃないですか」
「大変さって君……。だったら言わせてもらおうけどね、主人公君さ、
異世界にとばされたっていうのに冷静過ぎないかな。僕だったら軽
くヒステリックになると思うんだけど」

「まあ、一応水波は冷静なキャラって設定なんで」

「最初っから絶望してたあげく無茶苦茶テンパってたけどね。それ
から猫さんさ、何でリアル鬼ごっこ知ってるの？ 猫さんの名前が
外国人っぽいのに佐藤さんがいなくなるってどういう意味？」

「ミナギラ・アル・ユーロ・バスタードは実は王妃って設定なんで
す。十二話にできます、この設定」

「王妃だからこういう名前ってことかいそれ。全国の王妃さんに謝
ってほしいね。……しかもそうなる佐藤さんがいっぱい居ること
になっちゃうんだけど、異世界に」

「はあ……そうなっちゃいますね……」

「そうなっちゃうよね。あとは猫さんさ、名前が長すぎるね。なの
に説明は短すぎるね。勇者になった主人公君が何をすればいいかわ
からないよね、これじゃ」

「ミナギラ・アル・ユーロ・バスタードと共に王様を殺すのが水波
の目的です」

「やけに生々しいね。しかも猫さん王妃のくせに王様殺そうとしち
やってるし」

「王様が憎いですからね、ミナギラ・アル・ユーロ・バスタードは」
「ミナギラ・アル・ユーロ・バスタードね。君が何度も言うから覚
えちゃったよ。記憶力凄いね、君」

「いやあ、恐れ入ります」

「褒めてないからね。……うん。それじゃ、また次の機会でという

ことで」

「え！　なんでですか！」

「なんでもなにも、これじゃあ流石に出版は厳しいよ」

「だ、大丈夫ですよ！　ネットの皆は褒めてくれますし！」

「ネットって、小説サイトのことかい？　『FC2小説』とか、『小説家になろう』とか？」

「はい！」

「あー、あまりあてにしない方がいいよ、そういう場所での評価って。皆さん素人だからね、結局のところ」

「そ、そんな」

「ま。他にも色々言いたいことはあるけど僕も忙しいからね。とりあえずこれ持ってお引き取り下さい」

「ハア」

ため息をつきながら、俺はセンター街の真ん中　十字交差点の赤信号を見て立ち止まる。周りにはビルが建ち並び、老若男女問わず大勢の人が立ち止まっていた。流石休日の昼間ってことか。太陽が輝いているのも理由の一つなのかもしれない。

やがて信号が青に代わり、俺は歩き出す。周りの人達も歩き出し、信号を渡り切った。

「どうだったのですか」

すると、信号を渡り切った俺に話しかける女の声が聞こえてきた。昨日一昨日と何度聞いたかわからない律儀な声。そいつは今、俺の目の前にいた。

「どうだったも何もねーよ。あんなの出版される訳ねーって」

俺がそういつてやると、「そうですね……」と残念そうに俯くミナ。地面に軽く向いた頭をぼんぼんと叩き、俺はミナと一緒に歩いてゆっくり歩く。ミナは涙ぐんだ目を服の袖で拭い、真っ直ぐ前を

向く。

「なあ、ミナ。やっぱこんなやり方じゃあムーガドンは救えねーって」

「いえ。やはりこの方法が一番いいかと」断言するミナ。「小説という媒体で私が見た未来を描き、最後に『これは本当に起こることです』と書けば絶対に皆さんわかってくれる筈です」

「んなこと言ってもよ……」

ミナのそのハッキリとした物言いに啞然となりながらも、俺はしっかりとミナの横を歩いた。

先月、俺はこの世界に連れて来られた。

この世界の名前はマハガドというらしく、全体的に平和らしい。抗争も戦争も起きず、全員が全員平和にのほほんと生活している。

だが、俺の隣で歩く妙齢の女性　ミナギラ・アル・ユーロ・バスタードは見てしまったらしいのだ。

自身の予知能力により。

ミナはここマハガドが、もう一つのどこかにある異世界　ムーガドンを襲うという未来を見てしまった。

焦ったミナはその翌日、異世界召喚術を持つ自分のお爺さんに頼み、俺をマハガドに召喚させた。ミナの家族は全員特殊能力をもっているらしい。どんなだそれ。濃すぎるだろ家族全員。

しかし俺は最初、異世界に召喚されたなど信じられなかった。なぜならここマハガドが、俺の元居た地球と何も変わらないからだ。

風景どころか、服装まで。

学生が近々始まるテストに歎き、見知らぬおじさんがランニングをし、お婆さんが杖をつきながらゆったり歩く。車がセンター街を走り、排気ガスを撒き散らしてもいた。

地球となんら変わらない異世界に、俺は召喚されたのだった。

「私の名前はミナギラ・アル・ユーロ・バスタードと言います。皆川豪様。お願いします。マハガドがムーガドンに攻め入らないよう、小説をお書き下さい」

召喚され光に包まれた俺の目の前に居たのは、無茶苦茶美人の女性だった。身長が男子の平均身長ギリギリの俺とほぼ同じ。長い黒髪が妖しさをかもしだし、キリツとした目鼻が年上のお姉さんとしての雰囲気をかたづけくっていた。しかもミニスカ。OLみたいな格好してるのに、黒いミニスカ。太ももが完全に見えていた。

「突然マハガドに召喚してしまいすみせん。しかし事態は刻々と近づいています。少しでいいので私の話を聞いて下さ」

「はい！ わかりました！」

ミナの言葉に被せるようにして大きく発言する俺。

まあ、つまり。

俺はミナに一目惚れをしたのだった。

「……やはりもう一度書き直すしかありませんか」

「そういう問題じゃあないと思うんだが……。書き直し過ぎてミナが見た未来とほとんど違う内容になっちまってるしさ、あの小説」

「駄目ですね、私」歩きながら再度涙目になるミナ。「未来なんか見えても、何も出来ません。豪様にも迷惑かけて、私……。もう駄目なんでしょうか……」

「またもや顔を俯き、ミナは立ち止まった。俺は「そんなことねーよ！」と叫び、ミナをあすなる抱きしてやる。」

「ミナは頑張ってる。毎日小説書き直したり誤字がないか確認したりして頑張ってる。悪いのは文章力がなくて根気がない俺のせいだ。ミナは悪くねえ。だから、泣かないでくれ」

「……ありがとうございます、豪様」

いいながら温かい手で俺の腕に触れるミナ。ああ、これだよこれ。このノリの為にどうでもいい異世界を救おうと俺は頑張ってるんだ。しかも、だ。

「じゃ、じゃあさ、ミナ……。いつものあれ、やってくれないか？」

「こ、こごでするか！」

俺の提案に慌てふためくミナ。だけどその一挙一動がまた愛らしくて、ついイジワルを言いたくなる。

「そつだよ。いつも俺の前でやってるじゃないか。他の人が居る前でやっても変わらないだろ」

「う……う……」

「なんだよ。俺の言うことが聞こえねーのかよ。じゃあもうやめろぜ、異世界を救うなんて。大体意味わかんねーしよ、小説書くなんで。めんどくせーし。未来を変える方法がそれしかねーなら、ミナが俺の言うことをきかねーなら、俺、もうやめるわ」

「ま、待って、くだ、さい。やります。やりますから」
真つ赤な顔で俺の方を向いて抱き着いてくるミナ。その柔らかい感触に溺れたかった俺だったが、こらえ、「やりますだって？」とミナを追撃する。

「やらせてください、だろ？」

「んぐ……。や、やら、やらせて、ください」

「へっへっへ。淫らな奴だよな、ミナって」

「じゃあやってくれよ。ミナの意味で、自分から。」

俺がそう言うとミナは、「はい……」と恥ずかしがりながら、服を脱ぎはじめた。まず上から。ブラまで脱ぎ、見えてくる豊満な胸とクリーム色の肌。

この時点で周りの男性がくぎづけになってミナを見始めた。女性は警察に連絡しようとしている。

赤くなりながら、ミナはミニスカを脱ぎ、白の下着を脱ぎ、靴を脱いで裸になった。何も纏わない、最高の眺め。

俺は昔から馬鹿にされてきた。

テストでいい点は取れず、運動神経もないに等しい。イジメも受けていた。いつもいつも俺は一人だった。かといって外見もお世辞にもいいとは言えない、そんな俺。

そんな俺が、勇者となつて異世界に召喚された。

解決方法は小説を書くだけ。

それなのに、何でも言うことを聞くドストライクの美女がいつも俺の近くにいる。

「……………」

無言になつて大事なところは両手で隠すミナ。俺を見ながら、周りを見ながら、無表情で赤くなる。最高だ。

この世界は、最高だ。

こんな褒美があるなら、ずっと異世界にいたっていい。

俺のことを変態と呼ぶ奴がいるかもしれない。現に、俺は今のミナを鼻の下をのばしまくっている。だけどな。

「ありがとうございます、豪様」

無表情から一変、幸せそうな笑顔で俺にそう言うミナ。

異世界召喚なんて凄いいことが出来る自分の肉親が死に近づいている時。その肉親が最後に一人だけ異世界に誰かを召喚しよう、と自分に言ってきた時。

わざわざそれを、自分の世界を救う為に誰々を呼びたいなんて大層な理由で誰かを呼ぼうと思うか？

異世界で生活するようになり、ミナが小説を俺に書かせて編集社に持ち込みをさせた時から、俺は気づいていた。

ミナは、俺という『変態』を呼ぶのが目的だったんだ。

一ヶ月。

ミナが予知した未来は、未だに訪れない。当たり前だ。

ミナは、そんな未来など予知していないのだから。

「このまま、横断歩道に横になってみるか」

「ひゃ……は、はい。わ、わかり、ました」

ミナは、ゾクゾクと快感でふるえる自分の体を必死になつて抑えようとしながら、恍惚な表情で信号に向かう。

大体さ、異世界人の奴も、わざわざ地球っていう異世界に住む奴

に頼らなくなつて、自分達でなんとか出来るだろ。

「ミナが自分で小説を書いて未来予知を公表すればよかったよ
うに。」

「あー、異世界召喚系サイコー！」

そう叫びながら、俺は横になっているミナを遠目で見て、満足した。

(後書き)

異世界召喚系がはやっているようなので、自分も書いてみました。

いじめられてたりした男子を何故に召喚しようと思うのか。異世界召喚なんて大それた凄いものを世界を救うなんてごもつともな理由で使おうと何故するのか。異世界に召喚されたとして、その男子は何故すぐに適応できるのか。何故異世界なんて自分とは関係のないものを救おうと切磋琢磨するのか。

思いつく限りのおかしな点を思いつく限りの方法で潰していったら、こんな感じになりました。我ながら残念な主人公とヒロインに落ち着いたと思います。

もし異世界なんか召喚されたら、自分は一生懸命元の世界に戻る方法を考えますね。普通に。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9638/>

異世界召喚系

2010年10月8日14時42分発行